

●神奈川県庁へ―四五歳の転身 七五年四月

横浜国大教授でNHKはじめマスコミにもしばしば登場し、人気学者だった長洲一二さんに、県知事選への出馬を説得したのが、当時横浜市長だった飛鳥田一雄さん。七四年夏のこと。長洲さんが迷っているとき「これは県民からの召集令状ですよ」と言って激励したことがある。そんな因縁もあって長洲さんが決断された後、県政の資料集め、政策作りなどを手伝った。一九七五年四月、長洲さんが知事選に大勝した直後、「一緒に県庁へ」との強い要請を受け、政策スタッフ（特別補佐官）として神奈川県庁に入った。

役所嫌いだった私が四四歳で、夢にも思わなかった地方公務員に転身した。連日超多忙、悪戦苦闘の日々で、「半年しか保たないだろう」「半年で辞めさせろ」というのが庁内外保守派の声だったようだが、その後一六年も仕え、副知事にもなったのは長洲さんの卓越した指導力のおかげだった。もう一つは取手町議四年間の地方自治体験だった。この体験がなかったら、おそらく県庁入りを引き受けなかったろうし、引き受けても一年も保（も）たなかったかもしれない。確かに「地方自治は民主主義の学校」である。

選挙終え慰労の言葉かけ合えば 「一緒に県庁へ」と知事に手握らるる

新緑に朝日まぶしき県庁に 両手かかげて長洲初登庁す

（本庁舎玄関前の広場に1000人が集まった）

「先生を頼む」とわれの手を握り 目を潤ませる教え子助教授

（横浜国大岸本重陳さん、彼は長洲さんの立候補に反対だった。故人）

これがこれ大統領制なるか昨日まで 貧乏研究者が今日は知事の補佐官

副知事と総務部長に挨拶す 総務部長は敵意むきだし

県幹部霞が関出身者ばかりなり これが果たして地方自治か

（副知事、主要部長、課長に国出身者がずらり）

知事とともに与党団会議廻れども われのことなど一顧だになし

某党の幹部はわれを呼び止めて にらんだあとで「議会はこわいぞ」

頻繁に飛鳥田(横浜)市長から電話あり そのたびに言う「クボチャン ガンバレ！」

(この電話で「久保さんは市長と電話で話せる人」とのハクが付いた。市長の配慮)